

## 「子どもたちの居場所づくりに関わって」

NPO 法人 TFG 田川ふれ愛義塾代表

工藤 良

### 1. 卒業した「めぐちゃん」からの手紙

私は、NPO 法人田川ふれ愛義塾で、世間で不良と言われている遊び・非行型の青少年の支援活動をしている。親御さん、あるいは公的機関から一時的に預かって、社会復帰や学校復帰に向けて共同生活をさせる活動を行なっている。そこで「めぐちゃん」という女の子と関わりを持ち、向き合ってきた。

「めぐちゃん」は私立の中学校に通っていたが、学校の勉強について行けず、地元の中学校に戻るようになった。戻ったときは良かったが、先輩とのトラブルがあり、いじめのようなものに遭い、トイレで一人、弁当を食べるようになった。そんな学校に足が向かず、たまたま近くにあったゲームセンターに立ち寄ったところ、友達ができ、当時のきつい思いに寄り添ってくれる友達がいる所が、彼女の居場所となった。あっという間に交友関係が広がり、暴走族関係、さらにその延長線上でやくざとも関わり、半年後にはドレスを着て飲み屋に勤めるようになった。シンナーにも手を出していた。塾には中学2年生の冬に来て、17歳になる直前に卒業していった。その「めぐちゃん」が送ってくれた手紙の一部を紹介する。

田川ふれ愛義塾を卒業して、8ヶ月たちました。

塾には1年半住んでいましたが、振り返ってみるととても短かったように思います。そして、1年半では普段できないような経験をさせてもらいました。

一番心に残っているのは登山です。私が方向音痴で、道に迷ったときも、塾生が迎えに来てくれたり、お互いに励まし合いながら頂上までつくことができました。登山の時、工藤さんが必ず「自分の人生だと思って登れ」といいます。

塾を卒業して、この言葉の意味がとてもわかりました。つらいときには険しい道を思い出して、あの時だって仲間と助け合って頂上まで登ったんだから大丈夫と自分に言い聞かせています。(中略)

今でも家族以外の人に心を開ける居場所はふれ愛義塾です。私にとっては家庭であり、学校であり、自分の存在を認めてくれた大切な場所です。もしここに行かずに、昔のままの生活を続けていたら...と考えるとぞっとします。

この手紙には、私がうれしかったところが三カ所ある。一つ目は、私が登山で伝えたかったこと、すなわち、「自分の道は自分で登っていくしかない。しかし、そのときには仲間の存在は大きな力になる」ということをしっかりわかってくれていたことである。登山は毎回きついが、塾で登山をやってきて良かったと感じた。

二つ目は、塾が自分の存在を認めてくれた大切な場所だと感じてくれていたことである。あとで述べるが、私は子どもたちに心とからだの居場所を提供したいと願って活動してきた。「めぐちゃん」にとって塾が居場所になっていたことをとてもうれしく思った。

三つ目、これが私にとって一番うれしかったことであるが、「家族以外の人に心を開ける場所は」と書いていること、すなわち家族は大切だと書いてきてくれたことである。「めぐちゃん」が私のところに来たときは、母親にも父親にも全く口をきかなかった。その子が親に感謝しており、「家族以外の人に心を開ける場所はふれ愛義塾です」と書いている。家族を一番大切に思っており、また家庭に心の居場所を見つけることができたという、この子の成長が本当に嬉しかった。

私は、「めぐちゃん」のように自分を振り返り、自分をしっかり見つめて、より良い自分を目指して頑張っていける子どもの役に立ちたいと願って活動をしている。この子のように、塾を卒業して自立して、自分の人生をしっかりと歩み始めた子もたくさんいるが、逆に、塾を逃げ出して昔のような生活に戻ってしまった子もいる。現実には甘くないが、私は決して諦めず、1カ月いる子でも、1年いる子でも、とにかく私は種をまきたい。この子たちが5年後、10年後、「工藤はようしてくれたな」とか、「あの人は俺の話真剣に受け止めてくれたな」という思いが湧いて、また私のところに戻ってきてくれたらいいと思っている。とにかく明日に答えを求めてはいない。

## 2. 私の生い立ちと経験

私の生い立ちであるが、私は中学2年生から暴走族に所属しており、17歳のときには三代目総長、つまり暴走族のリーダーになった。しかし、いまでは、当時はまったく逆の立場にいた福岡県警の中で講演をしている。なぜここに行き着いたのか自分を思い返してみると、ここでまた三つのポイントが出てくる。キーワードにすると、「憧れ」、「居場所」、「振り返り(反省)」である。

一つ目の「憧れ」とは、いまでも私が兄貴分だと思っている先輩との出会いにある。私の両親は、私が小学校2年生のときに離婚して、母親はスナックに勤めに出た。私には6つ年下の弟がいて、その弟と狭い団地で母親の帰りを朝方まで待っていた。当たり前だが、本当に寂しくて、いま考えてもつらかったと思う。

私の名前は「良(りょう)」というが、私が小学生のとき、「良、来い」と言って、いつもかわいがってくれたのが近所の当時中学生だった「兄貴」である。その兄ちゃんは本当に突っ張っていて、喧嘩も強かった。私のヒーロー像であり、この人みたいになりたいと思って、真似ばかりしてついて回った。いま振り返ってみると、突っ張っているとか、不良であるところに憧れていたのではないと思う。当時、寂しい自分にとって頼りになる兄貴のような存在に、居なくなった父親の男らしさや強さを求めていたのではないだろうか。その憧れのお兄ちゃんとの出会いが、私が暴走族に入った大きな要因である。

二つ目の「居場所」は、からだだけでなく心の居場所である。私は、小学校にしろ、中学校にしろ、学校が好きな方だった。勉強は小学校低学年で諦めて、全くわからなかったが、友達が居る学校は大好きだった。また、年上の人とよく遊んでいたのも、同級生より刺激的なことをたくさん知っていた。それらのことを同級生に話すと、皆が寄ってきて自分を認めてくれるのがうれしかった。頼りにされている、必要とされている、自分が仲間のために役に立っているという感覚をもった。この感覚は、特に暴走族の中で感じる事ができた。そこに自分が活躍できる居場所があった。

心地よい居場所はやがてはシンナーや覚せい剤といった薬物の世界に移り、どっぷりとはまり込んでいった。しかし逮捕されて、檻の中で「自分は何をしてきたんや」と考えた。大切な仲間、可愛い後輩を含めて自分はとんでもない世界に引き連れて来てしまったという思いから、何とかしなければと考えて、自分がやっていた極連会（ごくれんかい）という暴走族を、後輩のところまで一人ずつ説得に行き、完全に解散させて、ボランティア団体を立ち上げることにした。近所のごみ拾いを始めて、地域の人に段々認められるようになり、地元の祭りなどの行事の手伝いもやっていった。

私をワルの世界から明るい世界に戻してくれたのは、周りで支えてくれた多くの人たちのおかげである。しかし、最後はやはり自分自身だと思っている。檻の中で自分自身を振り返ることができたからこそ、いまの自分と活動があるのではないかと感じる。

なぜボランティア団体がふれ愛義塾になったのか。そのボランティア活動をする中で噂が広まって、昔の私のような子どもたちや親御さんから相談が来るようになった。私が一番驚いたのは、関東から九州に自殺をしに来て、たまたま私の噂を聞いた人が、私を頼って急に来てくれたことである。その人と会ったところ、「今日あなたと会わなかったら自殺をしていた」と言っていた。

こういう人たちの役に立てないかと思って立ち上げたのが、ふれ愛義塾である。自分がリーダーとなり、兄貴分となって、暴走族や薬物ではない、良い方向へと向かう居場所が作れるのではないかと考えて、そのような場所を作った。現在は13歳から20歳までの11名と、本当に毎日がドラマのような共同生活を送っている。

### 3. 私の決意と、大人や社会に伝えたいこと

私は現在の活動を通じて、本当に厳しい世の中になってきたと実感している。私のところに来ている子どもは、家庭と学校で、はぐれた子どもたちである。この子たちがこのまま育っていくと、社会に悪影響を及ぼすようになるだろう。実感として、5年から10年後が一つの山になるだろうと思う。30年後（もっと早いかもしれないが）、この子たちが親になったときに、親も子どもたちも地域の輪に入れられない存在となる可能性が大きい。

確かに悪いことをしている子どもたちは悪いのであって、自分で気づいていかなければならないとは思いますが、いまの世の中で、それを家庭のせいにしていいのだろうか。それは

間違っていると思う。70年代から80年代のように、いわゆる学校崩壊が起きて、不良が一気に増える時代がもう一回来ると予想されている。それにはちょっとした裏付けもあるが、そういう時代の入口を迎えていることが実感される。

しかも、いま子どもの社会は、当時よりももっと陰湿で、人と人との関係が切れた殺伐とした状態になっている。当時と違う点として、携帯電話を始めとする情報機器の発達が非常に大きい。人と人が直接触れ合うことが少なくなり、人間としてのつながりは薄っぺらなのに、交友関係だけは幅広いものがあり、良いも悪いも、ものすごく多くの情報を得ている。これは私の塾のテーマでもあるが、この子どもたちの問題に何らかの手立てをしていかなければ本当にきつい世の中になっていくと思う。

もう一つは、経済の厳しい状況である。経済状況が悪いことは犯罪の件数と大きく関係していると思う。もう一つ大きく関係しているのは、子どもたちの学力である。私は、家庭が厳しければ厳しいほど子どもたちの学力に影響するというを目の前で見てきた。そういう点も考えて、我々は学校の勉強やスポーツではぐれた子にとっての受け皿を、何らかの形で作っていかなければならない。

大人社会が子どもたちをビジネスの対象にしてしまったことが一番大きな原因であると私は感じている。この社会は大人が作り出してきたものなので、またその大人の手でこの世の中を変えて行けるとも信じている。私たちが直接、子どもたちの憧れの存在になることができないのであれば、憧れられる若者を育てていくことが必要だろう。

子どもの居場所についても同様である。極端かもしれないが、「最近の子どもは挨拶もろくにせん」という言葉をよく聞くが、自分たちから子どもに向かって本当に真剣に挨拶をしているのか。子どもたちが、このおじちゃん、おばちゃんに相談しようと思われるような大人になっているのか。そういうことを考えなければならない。子どもたちの心の居場所を作ってほしいと願っている。

いまが踏ん張りどきだと感じている。ちょっと遅いのかなという気もするが、いまならまだ、将来出てくるだろう社会への影響を半分に抑えることができると思う。青少年の居場所作りは、地域の皆さんとも家庭とも学校とも連携をとり合い、手をつなぎ合ってやっていかなければならないと思う。